



神田秀人

かんだひでと●山形県出身。小児精神科医、精神保健指定医、医学博士。人文学部卒業後に医学部医学科入学。山形県福祉相談センター所長、山形県立鶴岡病院院長を経て、2014年3月より現職。

## 挑戦の成果

今年3月に開院した「山形県立こころの医療センター」(前身は山形県立鶴岡病院)で院長を務める神田秀人さんは、本学人文学部を卒業後に改めて同医学部を受験し、医師になったという異色の経歴の持ち主。人文学部では心理学を専攻した神田さんだったが、研究を深めるほどに違和感を覚え、就職難の時代背景もあって就職を見送り、4年次の秋に医学部受験を決意。自らの迷いを断ち切るためのけじめとしての受験だったのだが、見事に合格し、その後は医学に関する膨大な知識・情報を詰め込む日々を送った。心理学を学んだ素地があったため精神科を専門に選び、特に小児精神科医が極端に不足していたこともあって、児童相談所等の現場で小児精神科の専門性を高めていった。

近年では、うつ病や子どもの発達障害、また高齢化社会を反映した認知症など、精神科医療を必要とするケースが増え、ニーズも多様化している。同センターでは北海道・東北エリアでも数少ない院内学級を併設した子どもユニットや医療観察法病棟、重症の精神科救急患者を受け入れるスーパー救急病棟などを整備し、県内で唯一の公立精神科単科の病院としての役割を果たしている。開院から約半年、安心して受診できる病院として地域の人々からの理解や信頼も高まり、見学や視察の申し出も多い。それでも神田院長は、さらに質の高い医療を提供するために優秀な医師の確保にも熱心だ。精神科医療の難しさややりがいをアピールするとともに、研修医には豊富な経験ができるプログラムを用意している。また、運動は脳にも良いため、精神障害者のフットサルチームを結成し大会にも出場している。新しいことを仕掛けなければ何も始まらない、というのが神田院長の持論で、つねにアグレッシブに現役の精神科医、院長として多彩な試みを行っている。

文系から医学部という方向転換は少々極端かもしれないが、「人生の岐路に立ったとき、よりやりがいが得られる方を選択してきた」という神田院長の人生訓には、学ぶべき事が多く、励まされる人も多いのではないだろうか。



# 山大聖火リレー



## 人文学部卒業後に医学部にチャレンジ。多様化する精神科分野で地域医療を拓く。

神田秀人 山形県立こころの医療センター 院長



北海道・東北地区でも2カ所しかないという精神科の院内学級の教室。児童相談所とも連携し、入院の必要が認められる子どもたちを庄内地区に限らず県内全域から受け入れている。



認定看護師と患者さんの状態について検討する神田院長。スタッフの育成にも熱心なこの病院には認定看護師も多い。心とむ背景の壁画は山形県出身の絵本作家・荒井良二氏の作品。